

Title	大英博物館蔵『伊吹とうし』 解題・翻刻付図版
Sub Title	
Author	辻, 英子(Tsuji, Eiko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2004
Jtitle	三田國文 No.39 (2004. 9) ,p.12- 26
JaLC DOI	10.14991/002.20040900-0012
Abstract	
Notes	図削除
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20040900-0012

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

大英博物館蔵『伊吹とうし』解題・翻刻付図版

辻 英子

成稿にあたっては、大英博物館蔵『伊吹とうし』の閲覧の機会を得、翻刻掲載の許可（二〇〇二年八月七日付）をいただくにあたって、同館のTimothy Clark氏には大変お世話になった。また、国立国会図書館には「伊吹とうし」（一軸）の熟覧の機会を得た。はじめに記して厚くお礼を申しあげる。

成立年代未詳 江戸時代初期頃か。写絵巻一卷。縦三三・〇×全長一〇八一・八厘。所蔵番号 J.p.287。白茶色地に菊花状の模様を金繡で織り出した薄絹表紙。花びらは萌黄色あるいは金の縁取り・埋め込み刺繍などを施し、縦に八〜九個を九列に描く。縦一六・二×横三・四厘、朱地に金泥で草花・霞引きの題簽に「伊吹とうし」と墨書し、表紙の左上に押す。内題なし。見返し・軸付紙ともに金紙、茶色の平打紐が付いている。牙軸。料紙は金泥霞に四季花本草花の下絵の入る上質の鳥の子。全二四紙、絵は全六図。奥書はないが、朝倉重賢筆と判断される。題簽に「上」とあることから、もとは「中・下」の三巻、あるいは「下」の二巻であったと、想定される。

一 伊吹とうし

「伊吹とうし」は御伽草子として知られている酒吞童子の生い立ちを描いたものである。伊吹大明神の申し子、弥三郎の子が伊吹童子（後の酒吞童子）である。その出生には、三輪山説話系の蛇婿入苧環型怪婚譚がまつわっており、挿話に素盞鳴尊の大蛇退治や日本武尊の東征と死が語られている。

諸本についての詳細は省くが、松本隆信編『室町時代物語類現存本簡明目録』（『斯道文庫論集』第一輯所収「御伽草子の世界」所収三省堂一九八二）の分類では、同氏の「例言」によると、「内容や筋の上に大きな相違のあるものはABC、内容や筋立はほぼ同じで本文に著しい相違のあるものは（一）（二）（三）」に分類してある。

A（一）東洋大・絵巻 大三軸

（二）国会・絵巻^上次 大一軸

（三）大英博・絵巻 大三軸

このうち「（三）」は、無款。江戸時代前期。Nos.174-176 一八八一年にWilliam Andersonの収集によるもので、沢井耐三

校注『室町物語集 上』(新日本古典文学大系 一九八九)に収められている。本稿でとりあげる大英博本は、右のABC分類のうち、A類に属すと見られる。なかでも、本文は、東洋大学蔵・島津久基旧蔵・絵巻(上中下三巻)に近い。これは『続お伽草子』(嶋津久基編 岩波文庫 昭和三十一年)に翻刻がある。市古貞次氏は、そのあとがきに、

三巻のうち、下巻には中間及び終りに脱文があるが、多分比叡山を追われた酒吞童子が西方へ赴き大江山に棲むことで結んだものであろう。他に類本のあることを聞かないし、内容的に見ても頗る興味あるものと思われるので、完本ではないが、ここに収めた。(二九一頁)

と推定された。その後、国会図書館から、上巻にあたる部分を欠いた『伊吹どうじ』(絵巻物一軸)が発見され、まことにこの推定どおりであった。佐竹昭広氏は、

はたして、酒吞童子が大江山へ移り住み、暴逆栄華に誇るところで終わっていた(『酒吞童子異聞』平凡社選書55 一九八四(初版一九七七)年 四七・四八頁)

と述べているが、これについては後述する。

大英博本(以下略称する)には東洋大本(以下略称する)の次の二場面がない。即ち、中巻の冒頭から中間にあたる、弥三郎の死に続いて大野木殿の姫は弥三郎の胤を宿し、三十三か月目に恐ろしい怪童を生んだ。伊吹童子こと後の大江山酒吞童子であった。次いで、下巻の冒頭に続く、童子の将来を恐れた大野木殿は、童子を伊吹山中に捨てる。動物たちに育てられた童子は悪事の限りを働き、伊吹大明神の逆鱗にふれ山を追われ、比叡山

に移るが、伝教大師の法力と山王権現の神力を恐れ逃げだし、西を指して飛行したところである。

このように見てくると、現大英博本一軸の題簽の「上」は、別に「中・下」あるいは「下」の存在を示唆する蓋然性は否めない。東洋大本及び国会本にある童子棄捨譚と後者にのみある伊吹を追われ大江山に居を構え栄華に誇った酒吞童子に該当する部分である。

ところで、大英博本(上)の配列と東洋大本には大きな異同がある。話の展開・紙継ぎ、本文の構成等を考慮に入れると、いまのところ大英博本は、もともと現状どおりであったと考えておく。筋立ては「簡明目録」B分類の赤木文庫旧蔵「伊吹山(大江山以前)酒典童子(仮題)」(『室町時代物語大成』二 昭和五六(初版昭和四九)年 角川書店 三五七〜三七八頁)の前半にほぼ合う。とすると東洋大本に錯簡があることになるが、詳細は後考を記したい。

二 大英博物館本と東洋大学図書館本

大英博本と東洋大本との異同を便宜上前者を主軸とし示すと、次のようになる。

大英博本の第4紙の冒頭は、

大こくには日に一こくのさけをのみ(第1行へ東洋大本、中第

6紙第1行)錯簡)

とあるところ、東洋大本では、

おそろしき神のうちと又は申子に／てなんおはしぬれは
や三郎とのも(上第3紙第1・2行)

とある。東洋大本のこの箇所は、大英博本では、第13紙「時に

大しやいかりをなし」(第1行)に始まる「かやうにおそろしき神のうち人又は申子にてなんおはしぬれは弥三郎とのも」(第18・19行「紙継ぎ」とある文に当たるところで、東洋大本の「時に大しやう」(第1紙第1行)にはじまる文は下巻の冒頭に位置し、「かやうに」(第19行)〔続お伽草子〕には、「かやうに」の次に(脱文アルカ)(一六〇頁)としている)の次に第1紙の紙継ぎがあり、第2紙に入る。大英博本では、「かやうにおそろしき」(第18行)は一連の文で、二語間に紙継ぎはないので、現蔵本に関する限り、「かやうに」の後に錯簡は想定しにくい。一方、東洋大本の場合、「かやうに」(下第1紙の後に紙継ぎのあることから、大英博本に照合すると後続の文は、上第3紙第1行冒頭の「おそろしき」に繋がり、錯簡と考えられる。ただし、東洋大本にある「や三郎とのも」たけくおそろしきませりとて上下はんみんおそれをなしけり」(第3紙第3〜5行)の文は大英博本には見られない。該当部分の大英博本と東洋大本とを対比すると次のようになる。

かやうにおそろしき神のうち人又は／申子にてなんおはしぬれは弥三郎とのも (第13紙、紙継ぎ) (東洋大本、くたけくおそろしきませりとて上下はんみんおそれをなしけり此や三郎とのはへ上第3紙第2〜4行) 野山のけたものをかりとりて (第14紙第1行)

行末の「弥三郎とのも(は)」が重なり、しかも紙継ぎのあることから、あるいは大英博本に、書写の際の目移りによる脱落があったかもしれない。

次に大英博物館本と東洋大学本(カッコ内に)との異同を示

すと次のようになる。

- ・ ほとんと (おほかた) 人けんのしわさにはあらさりけり (第1紙第8・9行)
- ・ つうりきをえたりとそ (も) みえし (1・11)
- ・ おほくのみ給ふ事 (に) ためしなき有さま也 (1・14)
- ・ よのつねに (の人) にこえての みひたりておはしぬれは (4・3)
- ・ はひこりしによつ (ナシ) て (4・10)
- ・ とし (り) く人をも (4・12)
- ・ おきなうは (ふうふのもの) あり (5・3)
- ・ ふうふのものにて (そ) 侍り (き) (5・9)
- ・ さけをたへてあひまち侍る (たまへり) (6・9〜10)
- ・ もこよひ (もたひのうへに) ふしたり (8・6)
- ・ すんく (つた) にきり給ふ (8・7〜8)
- ・ いなたひめを はしめ (みめ) として (9・1〜2)
- ・ あまのむら雲の けん (つるき) を給はり (給ひ) て (9・18〜19)
- ・ みことをそ (うし) なひて (10・16〜17)
- ・ このみつ (しみつ) をさめか井と名つけしなり (13・10〜11)
- ・ うしみるまに (などを) うはひとりうちころし (なとして) しよくしけるありさま (14・5〜6)
- ・ 母うへや (ナシ) めのとのつほねなとはゆめにもいかでかしり侍るへき (15・9〜10)
- ・ めのと大きにおとろきて (こはそも) いかなる御事そとしきりにとひ侍りけ (つ) れは (15・12〜13)

・おた巻といふものにはりをつけて (ナシ) (略) ひめきみに
 ぎつけ (興へ) 給ふ (16・3・7)
 ・もすそにはりを 取つけて (さしをたまきにつけて) あした
 にこれを見侍り (ナシ) しかは (18・2・3)
 ・へんけのものゝしわさなりて (と) (18・5)
 ・弥三郎とのゝ家にそとまり (到り) ける (18・8・9)
 ・たゝならぬ身とさへなりて (ナシ) 候へとも (19・4)
 ・としころ (日ごろ) さけをすき (このみ) てゆゝしくのみ
 給ひしかとも (22・3・4)
 ・しんくかきくれたる (たり給ふこと) こそことはりなれ
 (22・7・8)
 ・しし (給ひ) たりと思ひて野への (をくりをして) つかにつ
 きこめたれば千日といふにさけのえひ (ナシ) さめしほと
 に (22・18・23・1)
 ・かゝるためしも あり (あれば) (23・2・3)
 ・出給ふらんと思へと (も) つみにそのさたも (ナシ) なか
 りけり (23・5・6)
 以上の結果から、語彙における異同は微少に留まることから、
 大英博物館蔵本と東洋大学蔵本とは同系統本であることが明ら
 かになった。

三 大英博物館本と東洋大学本と国会図書館 本と

先に述べたように、市古貞次氏によって東洋大本は下巻に脱
 文のあること、その後佐竹昭広氏は、『日本古典文学大辞典』に、

(一) 東洋大学蔵絵巻上中下三巻。上巻に錯簡、下巻に脱
 文・脱落。(二) 国会図書館蔵絵巻一卷。(一)の上巻部を欠
 く。もと全二巻か。(二)四頁
 と解説されているが、錯簡・脱落・脱文の詳細についてはふれ
 ておられないようである。

国会図書館蔵『伊吹とうし』一軸(寄別10148)は現在インタ
 ネット・貴重書画像データベースでも公開されており、それ
 により概要を知ることができる。

大英博物館本と東洋大学本と国会図書館本とを照合した結果
 次のようなことが明らかになった。

一 国会本(以下略称する)の冒頭部分、「さる程に、弥三郎殿
 ははかなくなり給ふよし聞こえしかは(第1紙)より「八十年
 たいないに宿りて、白はつの老翁にて生れ給ふ。これ(第5紙第
 16行)は、東洋大本の中巻第1紙第1行ゝ第5紙第19行)にあたる。
 次に、東洋大本中巻の、

白はつのらうおうにて生れ給ふこれ(第5紙第1行、紙継ぎ、
 錯簡)／大くくには日に一こくのさけをのみし(第6紙第1行)

右の文は大英博本にはなく、国会本(下)に次のように見える。
 白はつのら／うおうにてむまれ給ふこれすなはち、／かせう
 ふつのけしん也しゆしやうさいとの(第5紙第15・17紙)

すなわち、右の文に照合して、東洋大本の「これ」の後には紙
 継ぎのあることから、同下巻の「すなはちかせうふつのけし
 んなり」(第2紙第2行)に繋がり、錯簡と考えられる。この段に
 該当する国会本と東洋大本(カッコ内)との異同は次のとおりで
 ある。

- ・四方におちりたる（うせちりたりし）人民とも（第1紙第2〜3行）
- ・もとのすみかにかへりつゝなりわひをいとなみしほとにい
つしか（かうさとにそかへりけるさてこそ）ところ（の）
く（ナシ）はんしやうし（とて）（1・3〜5）
- ・さるほとに（かゝりけるところに）おほのき殿のひめきみは
このよしを（つたへ）きこしめしなけき給ふ（事こ）そあは
れなる（れ）（1・6〜8）
- ・その秋（夜）のさけをは（しゐ）たてまつるましきものを
とちたひ百たひくやみ（かなしませ）給へと（1・9〜11）
- ・かなしみあへり（給へりけれ）（2・4）
- ・物をの給ふこと（を）あやしむへきにあらす（とかく）月
日にそへて（4・2〜3）
- ・はゝひめきみ（うへ）は申にをよはすおほの木殿
も北のかた（ふうふの人）もてうあひし給ふ事なのめなら
す（4・4〜6）
- ・おに子をうみたまへりとさゝやきし（なとゝ取さたしける）
か（4・9）
- ・おとこ女も（上下）たゝこの事をのみさたしけり（申し
あひけるは）（4・11〜12）
- ・又（ナシ）このちこ（ちゝ）さけをあいしてのみ給ふ
事なのめならずと（よし）聞えしかは（4・14〜16）
- ・大くくに（の）らうしと申（せし）せいしんは（5・14）
- ・すなはち（さる程に）（略）人もかよはぬたにそこの（な
る）いはのはさまに（6・6〜8）

- ・おほの木とのゝのなさけなし（く）ころし給へる
そとおもひて（ことのうらめしけれと）（8・2〜3）
 - ・こらうやかんのたくひもかいしんもなさずして（ひとへに
おそれてかへつて）しゆこしたてまつるていなり（けるあ
りさまたゝ人ならず）さるうさき（むしな）たぬきなどか
（のけもの）おりく（に）（ナシ）花をさゝけ（8・10〜14）
 - ・さしも草はふううふしのくすり也（となりけるにや）（8・
15）
 - ・ちんさな（ナシ）し給ふれいちなれば（11・12）
 - ・にしを（さし）トアリ。国会本ナシ。脱カ）てそとひゆきける（11・
18〜19）
- この後に、国会図書館本には、大英博物館本・東洋大学本にな
い「大江山」の場面が続く。

四 国会図書館本について

装演は大英博物館本と同一。料紙の詞書部分は金泥菖蒲・蔓
草・秋草地文の下絵の入る上質の鳥の子、これはスベンサー・
コレクション蔵「大職冠」絵巻三軸（拙著『スベンサー・コレクショ
ン蔵日本絵巻物抄 付、石山寺』所収 笠間書院 二〇〇二年）と瓜二つ
のものである。書体は流麗巧妙で、絵も細密・豪華である。全
二三紙。絵は全六図である。奥書はなく、絵・詞ともに筆者未
詳。第一紙右下に「亀田文庫」の朱印があり、その左の朱円印
に「昭和十九・三・二十四購入」と記す。

亀田文庫とは、「亀田（候吉）文庫」のことで、この文庫は個人
の蔵書を一括購入したものではなく、旧帝国図書館の購入基金

の寄贈を受けて、随意に購入した資料に付された文庫名である。昭和一四年五月に実業家亀田候吉から愛息の遺言に基づき寄贈された。善本が多く当館の貴重書に指定されているものが多くある。(監修国立国会図書館『国立国会図書館百科』出版ニュース社一九八九〔初版一九八八〕年)

本絵巻について、気づいたことを記す。

表紙の題簽(縦一六・三×横三・五釐)の「伊吹とうし」は大英博物館本と同筆。右下(上から一二・二釐の位置)に朱紙の擦消があり現状では、白の下地が出ている。この擦消についてであるが、はじめマイクロフィルムで点検したときには、見消の跡のように黒く写り、その形状が目された。インターネット画像では、それが白く写る。実物によると、例えて言えば「下」の文字の第一画の上部と第三画の右上部の二箇所黒い色が認められる。これはあくまで推定であるが、その形状からして、擦消以前には「下」の文字が記されたいた、と考えるに至った。題簽の文字・装潢、表紙、料紙、牙軸ともに大英博物館本と同じことから、現在失われている紐は、もとは現大英本と同じ表紙と同系の茶色の平打紐であり、両者は一対で「上・下」全二巻からなるものであったと推察される。

その傍証として、絵の共通点を挙げると、まず国会本(絵一)は、弥三郎の遺児を宿した姫君は三十三月を経て玉のような男子を産む。髪は黒々と肩までのび、齒は上下に生え揃った若君を抱く乳母。見守る女房たちについてである。前列左二人の女房は、最終場面(絵六)、酒吞童子が大江山に移り住み、榮華に誇るところにも再度登場し、同位置に描かれているのだが、そ

の左から二番目の女房の表着は、白地に縹色と赤色の花に萌黄色の葉を散らした文様であり、大英博本(絵四)の前左二番目の女房の衣装と同じである。また、同場面の畳の緑色と縁取りの文様も同様である。国会本(絵六①)中央の松は、大英博本(絵四)中央の松の描き方と彩色・葉の先端の細部にいたる筆使いまで近似する。これらの共通性は両絵巻の絵が同じ絵師の手になることを示唆している。

次に詞書については署名の明らかなスペンサー・コレクション蔵『大職冠』の朝倉重賢筆に酷似する。時代の書風を考慮に入れても重賢独特の筆癖もでていることから重賢筆と判ずるに至った。料紙の同一性についても当時よく用いられたものではあろうが、同様に考える。

以上の調査の結果をまとめに替えると次のようになる。

- 一 大英博物館蔵本と国会図書館蔵本とはもと一対から成る上下全二巻であった。
- 一 詞書は上下とも朝倉重賢筆である。
- 一 絵の筆者は不明であるが、大英博物館本と国会図書館本とは同一の絵師による。
- 一 本稿の末尾に付けた両絵巻の法量記録は本絵巻の近似性・一対性を語っている。
- 一 東洋大学蔵本の上・中・下には錯簡がある。下巻に脱文・脱落がある。

補記

入稿後、国会図書館蔵『伊吹とうし』一軸について、石川透氏は「第三編 朝倉重賢筆奈良絵本・絵巻類」で、朝倉重賢筆に同筆と判断されている（奈良絵本・絵巻の生成「分類Ⅱ」三 弥井書店 平成十五年（二一八頁）ことを知った。ここに記して賛同の意を表する次第である。

また、東洋大学図書館蔵『伊吹とうし』三巻（寛永延宝頃写の熟覧の機会を得た。ここに記して、ご厚意に深く感謝申しあげる。

大英博物館蔵本『伊吹とうし』詞書

むかしあふみのくに伊ふき山のふもと
に伊吹きの弥三郎殿と申て名たかき
人侍りけりこれは弥太郎とのと申
せし人伊吹大みやう神にいのりたて
まつりてまうけ給たりし子也されはにや
そのけしきゆゝしくけたかくして心た
けく身すくやかなりちからわさはやわ
さなとはほとんど人けんのしわさに
はあらさりけり山をうこかし岩をつん
さきてんくはうのけきするよそほひ
まことにつうりきをえたりとそみえ
しつねに野山をかけりてけた物を
取てしよくとし給へり又さけをあいいし
て
おほくのみ給ふ事ためしなき有さま也（第1紙）

〔絵一〕（第2・3紙）

大くくには日に一くくのさけをのみ
し人ありといへりこの弥三郎殿は
よのつねにのみひたりておはしぬれは
そのかきりはかりかたしみな人申やうも
しこの人は伊吹大みやう神のけゝんか
とそあやしみをなしけるそのゆへはむかし
出雲のくにひの川かみ鳥上のたけと
申ところとし久しくすみ侍しおろ
ちありおかしらともに八ありしか八の
を八のたにゝはひこりしによつて是を
やまたのおろちとそ申ける久しくこ
のところにすみてとしゝに人をのみ
けるほとおやをのまれては子かな
しひ子をうしなひてなくおやいく
千万といふかすをしらすこゝにそさの
おのみことゝ申たてまつるはいさなき
さなみのみことの御子天せう太神の御
おとうとにておはしますこのくにとよ
あきつしまの御あるしとしてあまくたら
せ給ひしときはしめていつものくにひの
川かみといふところにいたり給ふその
ところにおきなうはあり一人のをと
めを中にすへてなきかなしむ事せ
つなりみことあやしみ給てなにゆへにか
（第4紙）

くなきかなしむそととひたまへはおきな
こたへて申やう我らは此くにの神にて
候かおきなをはあしなつちうはをは手な
つちと申てふうふのものにて侍り又は
なるをとめはいなたひめと申てふうふ
のものゝさいあいのむすめにて侍りし
かるにこのところにやまたのおろち
と申て尾かしらともに八ある大しやの
侍てとしことに人をのみ候かこよひは
このひめをかのおろちにのまれなんと
すこのゆへになきかなしむなりとそ申
けるみことこのよしきこしめしさあら
はそのひめをわれにあたへよおろち
のなんをはすくふへしとのたまへはお
きなうはよろこひかしこまりてやかて
いなたひめをみことにたてまつりぬこと
し八さいなりとそ聞えしさてみことはお
ろちをころし給はんためにはかりことを
なし給ふまつゆかをたかくかまへてい
なたひめをしやうそくさせひんつら
にゆつのつまくしをさゝせてゆかの
うへにすゑられたりゆかの四方のめく
りには火をたきまはし火より外八の
さかゝめに八しほりのさけをたゝへて
あひまち侍るさるほとに夜もふけし

かはいなひかりときくして雨風吹し
ほりいかつちなりはためき大山のくつる
るかことくしてやまたのおろち出きた
れり八のかしらことにこほくのことく
なるつのおひて日月のことくなるまな
こをかゝやかしたれはおそろしともいふは
かりなしやかてゆかのうへなるいなた姫
をのまんとするにゆかのあたりに火を
たきめくらはしはらくたゆた
へり(第6紙)

〔絵二〕(第7紙)

時にもたいのさけの中にいなた姫
のかけのうつれるを見ていなたひめこ
こにありとや思ひけん八のかしらを八
のさかゝめにうちひたしてあくまでさ
けをのみけるほとにあまりにのみえ
ひてもこよひふしたりその時みこと
十つかのけんをぬきておろちをすん
くくにきり給ふ尾にいたりてつるき
のやいはすこししろみたりつるきを取
なをしおをさきわけてみ給へはおの
中にあやしきつるきありけり此つる
きおろちのおにありしときくろ雲つ
ねにおほへるゆへにこれをあまの村
雲のけんと名付けり是さいしやうの

つるき也わたくしにもつへからすとて天
せう太神にたてまつり給ふこのおろち
すなはち伊吹大みやう神のほつたい也
此神のけゝんし給ふゆへに今の弥三郎
とのさけをこのみ給ふにやとをしはかり
(第8紙)

申侍りぬさてそさのおのみことはいな
たひめを^{なご}はしめとしてすかの里にすみ
給ふいつもの大やしろこれ也神あから
せ給てもこくとをまもり人民をあは
れみ給ふ御めくみなをしもふかくおはし
ますゆへに二百万さいを過てのちふ
たゝひ世にいて給ふ人わう十二代のみ
かとけいかう天皇のみこやまとたけ
のみことゝ申たてまつるはすなはち
そさのおのみことの御さいたんとそき
こえし此御ときにあたつてゑそかしま
のえひすともみかとしたかひたて
まつらすあつまのくにゝをかすめ人民
をなやまし侍しほとにみかとけきりん
ましゝゝてこれをたいらけんためにや
まとたけのみことをはしめてしやう
くんになし給て関のひかしにつかはし
給ふこの時伊勢太神宮よりあまの
むら雲のけんを給はりてみことあつまへ
くたり給へはえひすともたはかりてかれ
(第9紙)

のゝくさに火をつけてみことをやき
ころしたてまつらんとしけるにみことつる
きをぬきて草をなきはらひ給しかは
ほのほしりそきつゝかへつておほくのえ
ひすともほろひにけりこれによつて此
つるきを草なきのつるきとなつて給ひ
けりさてそれよりたひゝのたゝかひに
おほくのえひすをせめなひかしてみこと
はかみつけしなのゝくにをへてのほらせ
給ふさてもむかしいつものくにゝてそさ
のおのみことのころし給ひしやまたのお
ろちはすくにそのかたちは秋の霜の下
にくちて二百万さいを過しかともしん
れいはなをれきゝとして天地の間を
はなれすおんかきをさしはさむ念ふか
かりしかはすなはちやまとたけのみことを
そこなひてむかしのむくひせんと思ひ
てしなのよりみのにいつる山ちのよき
みちもなきせつしよにふしたけ二三十
ちやうはかりの大しやとなりてよこたはり
ふし侍りきみことこのよし御らんして
すこしもおとろき給はすこれはことの
ころにてわさはひし給ふ
(第10紙)

神ならんとおほし

めしてまたけこえて

そとをり給ける (第11紙)

〔絵三〕 (第12紙)

時に大しやいかりをなしてもとよりふうすい
りうわうのけゝんなれはかしらより雨を
ふらしおより雲きりをおこしてたちまち
に山中をくらのやみになししかはみことの
御心たちまちにえひ給たるかことくにし
てはうせんとして行ききもさらにわき
まへ給はすされともとかくしてふもとに
下給へりかたはらをみたまへはいききよき
しみつなかれたり此水にて御身をひやし
給へは御ほとをりさめにけりよつてこの
みつをさめか井と名つけしなりされ共
みことは御こゝちおこたらせ給はすしてつ
ゐに伊せのくにゝてかくれ給へりその
御しんれいしら鳥となりてにしをさし
てとひ給ふかはちのくにしら鳥の大明
神これなりそのたゝりをなしつる大し
やこそいふきの大みやう神にておはしまし
ぬれかやうにおそろしき神のうち人又は
申子にてなんおはしぬれは弥三郎とのも (第13紙)

野山のけたものをかりとりてあさゆふ
のしきもつとし給へりもしけものをと
りえさる日はてんふやしんのたからと
する六ちくのたくひたき木をおへる馬

田をたかへすうしみるまゝにうはひとり
うちころししよくしけるありさまきしん
といふはこれなるへしのちには人をもく
ひ給ふへしとてみきゝしほとのもの
みなくところをすてゝ四方へにけ
ちりしほとに伊ふきのさとのちかきあ
たりは人すまぬ野原とそ成にけるその
ころおなしきくにゝおほの木とのと申
てうとくの人侍りけりきんりの人くにお
もんせられおほくのけんそくともをし
たかへてまことにゆゝしきありさまなり
此人さいあいのみすめを一人もち給ふみ
めかたちうつくしく心もやさしくありしか
は父母これをかしつきてあてなる人に
あはせんとこゝろさしつゝ十六の春秋をゝ
くりむかへて過しけり世にある人のもて (第14紙)

なし給ふひめきみなれはものふかくすみ
なしてかりそめにも人にまみゆることも
なくあまたのもりめのとにいつきあかめ
られ月をなかも花にたはふれてあかし
くらし侍りけるところにいかなる人にや
ありけんこのひめ君のもとへよなくかよ
ふことありけりしかるに日夜かたはらを
立さらすして宮つかへする女はうたち
もあへてこれをしらすまして母うへや

めのとのつほねなどはゆめにもいかでか
しり侍るへき月日すてにみちてたゝ

ならぬけしきにみえ給へはめのと大き
におとろきていかなる御事そとしきり
にとひ侍りければひめきみの給ふや
うたれとはしらすそのありさまけたか
き人のよなくきたり給ふとこそお
ほゆれとありしかはそれはもしまえんけ
しやうのものにてそ侍るへきあさまし
き事かなと思ひてはゝうへにかくと
申すはゝうへ大きにおとろきさはきて
さためてへんけのものゝしわさ成へし
とにかくにはうへんをめぐらしてその
ぬしをあらはさはやとおほしておた巻
といふものにはりをつけてこれをこ
よひまれ人のもすそにぬひつけ
たまへとてひめきみに

さつけ給ふ(第16紙)

(絵四)(第17紙)

さてその夜かのまれ人のきたり給ひし
かはをしへのまゝにもすそにはりを取
つけてあしたにこれを見侍りしかは
そのいとかきのあなよりそ出にけるさ
れはこそへんけのものゝしわさなりて
うたてしさいはんかたなしさてそのいと

をしるへとしてたつね行ければいふき
山のほとりなる弥三郎とのゝ家にそと
まりけるもとよりこの人はたゝ人に

あらずと聞えよひしにかゝるふしきを
あらはし給へはさては神にておはします
かとおそれあかめ侍りけりおほの
きとのこのよしきこしめしかやうの人
のわかむすめのもとへかよはせ給はゝい
かにもうやまひたてまつるへしもし
御こゝろにさかひなはかならずあしかるへ
しいかにもかのまれ人をなくさめたて
まつり給へとてさんかいのちんふつを
とゝのへもたいにさけをたゝへてひめ
君のもとへをくり給ふ夜にいりて弥
三郎殿わたり給ふひめきみ申給ふやう
このとし月かくちきりをこめてたゝ
ならぬ身とさへなりて候へともつるに
君のうるはしき御ありさまを見たて
まつらさるこそあちきなく侍れとすら
み給へはまことにうらみ給ふもことはり
なりこのとしころしのひしこゝろさしは
はらみ給ひしところの子はかならず男子
なるへし心たけくいかめしうして天下
のぬしともなるへかりしをかやうにわか名
をもらしなは天下をとらんほと

のくはほうはあるましさりなからよく
したゝめなはこのくにあるしと

なるへしわれこそ伊吹の弥三郎

なれとその給ひけるさるほとにさん
かいのちんふつをもつてさけをさま
くにしみたてまつりぬ御けしきよ
く見えたまへはおほのきとのもきた
のかたもたち出でたいめんしたまふ（第19紙）
かなたこなたより御さかつきを

さしまいらせなとし

夜もすからさけ

を

すゝめたてまつり

給ふ（第20紙）

〔絵五〕（第21紙）

あまりにいたくのみえひて御こゝろも
みたれしかは伊ふきにそかへらせ給ひ
けるとしころさけをすきてゆゝしく
のみ給ひしかともかくのことくにえひ
みたれ給ふことはなかりき七つのさかゝ
めにたゝへたるさけをのこりなくのみ
ほし給ぬれはしんくかきくれたるこそ
ことはりなれさて夜のふしとにいり
給ひつゝあともまくらもしらすして

ふし給ふかつみにはかなく成り給ふ一日
くれ二日すぎ七日にいたるまでおき

いて給ふ事もなかりしかはみなく

申やうさてはむなしくなり給ふそとて

野へにをくりたてまつりつかにつき

こめ侍りけりもろこしのりうけん

せきはちうさんのいちにいたりてさけ

をのみあまりにえひしつみて人心ちも

なかりしかはししたりと思ひて野へのつ

かにつきこめたれは千日といふにさけ（第22紙）

のえひさめしほとにすなはちよみかへり

てつかをくつして出たりとかやかゝる

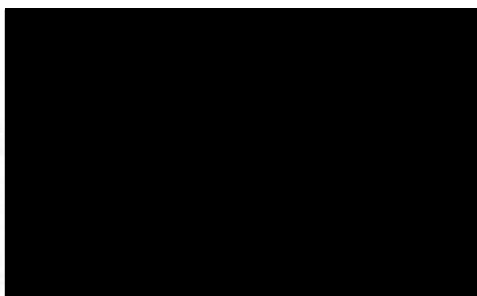
ためしもあり弥三郎殿はことにつうりき

をえ給ひたる人なれはいまにえひさめて

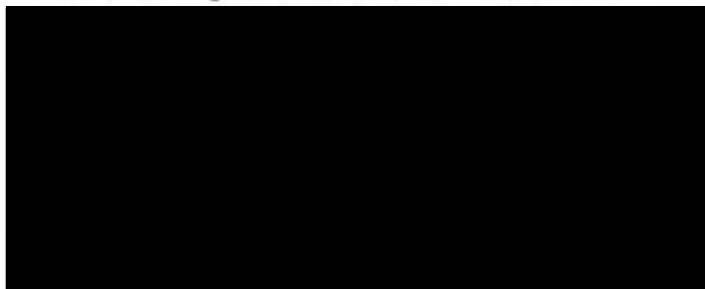
つかをくつして出給ふらんと思へとつゐ

にそのさたもなかりけり（第23紙）

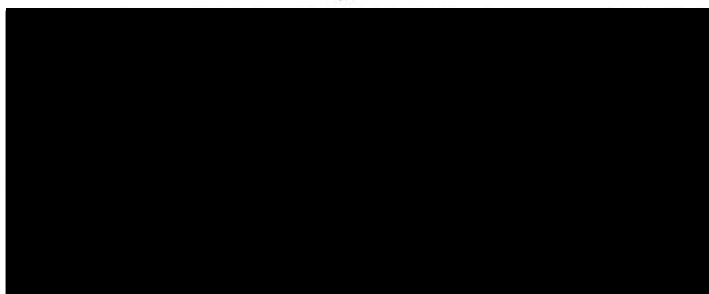
〔絵六〕（第24紙）



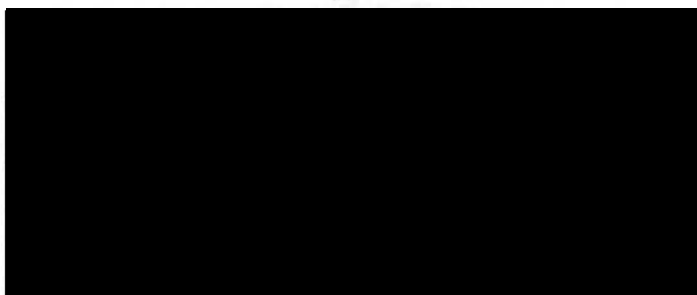
伊吹とうし表紙 大英博物館蔵
(All rights reserved the British Museum)



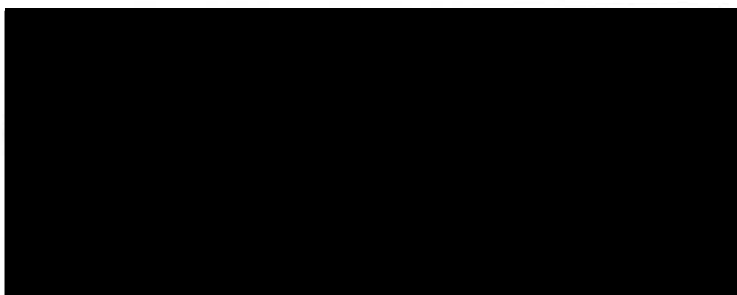
絵一



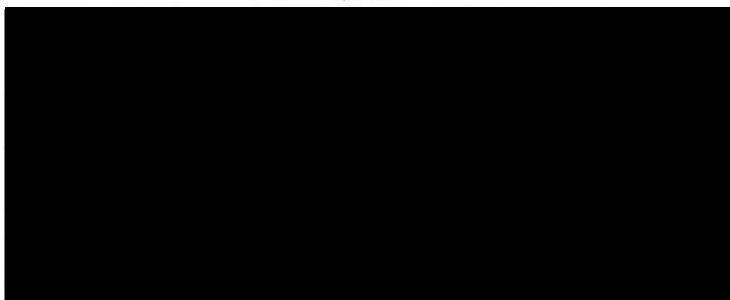
絵一



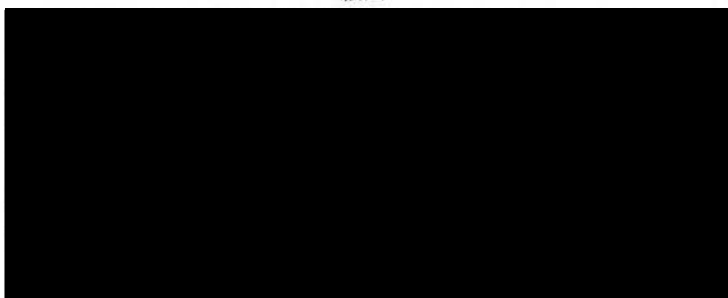
絵二



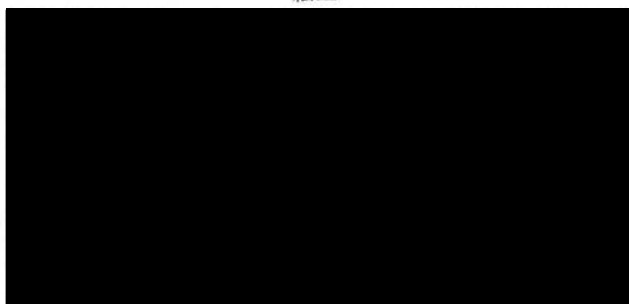
繪三



繪四



繪五



繪六

大英博物館蔵 伊吹とうし上

(所蔵番号 Jp.2877)

縦 33.0

紙 数	横(糎)		詞(行)
第1紙	49.0		14
第2紙	48.0	絵一 ① ②	
第3紙	48.4		
第4紙	49.4		19
第5紙	49.4		20
第6紙	49.0		20
第7紙	48.5	絵二	
第8紙	49.6		19
第9紙	49.7		20
第10紙	49.7		20
第11紙	22.6		6
第12紙	49.5	絵三	
第13紙	49.8		19
第14紙	49.4		20
第15紙	49.4		20
第16紙	25.9		7
第17紙	49.5	絵四	
第18紙	49.4		19
第19紙	49.4		20
第20紙	22.5		7
第21紙	49.0	絵五	
第22紙	49.3		19
第23紙	26.2		6
第24紙	49.2		
合 計	1,081.8		275

見返し 36.0 軸付紙 12.0

国会図書館蔵 伊吹とうし(1軸)

(所蔵番号 寄別10-48)

縦33.0

紙 数	横(糎)		詞(行)
第1紙	49.0		15
第2紙	49.7		18
第3紙	49.2	絵一	
第4紙	50.1		19
第5紙	49.4		20
第6紙	24.5		9
第7紙	49.5	絵二	
第8紙	49.8		19
第9紙	24.5		9
第10紙	49.0	絵三	
第11紙	49.9		19
第12紙	49.5		20
第13紙	49.6		18
第14紙	49.5	絵四	
第15紙	49.4		19
第16紙	49.5		20
第17紙	49.5		17
第18紙	50.4	絵五	
第19紙	49.4		19
第20紙	21.5		5
第21紙	49.0	絵六 ① ②	
第22紙	49.0		
第23紙	28.0		5
合 計	1,038.9		251.0

見返し 36.0 軸付紙 12.0